

ホメーロス風讃歌第三番『アポローンへの讃歌』における  
テューポーンの挿話 (305-355)

安村典子

1. 序

アポローン讃歌に関する議論のなかで、従来最大の論点となっているのは、おそらくこの讃歌の作成における統一性の問題であろうと思われる。18世紀末にルーンケンが、この讃歌は元来二つの独立した詩から構成されているとの説を発表して以来 (David Ruhnken: *Epistola Critica*, 1794), 「デーロス島のアポローン」(1-178) と「ピュートーのアポローン」(179-546)の二つの部分に分割して考える説が圧倒的な優位を占めるに到った<sup>(1)</sup>。しかしながら最近の研究は、この两部分を再び結び付けようとする傾向にある。すなわち两部分の差異を認め、別の詩人の手になることを認めながら、他方両者の間には何らかの統一性があるという考えである<sup>(2)</sup>。

この問題に対する私の立場は、基本的にはこのような近年の見方に沿ったものである。すなわち两部分には多くの研究者たちがすでに指摘しているように、文体、言語、韻律等の点で明らかな差異がみられるが、他方類似点もまた数多く存在する。したがって両者は偶然のなりゆきで併存する結果となったのではなく、何らかの統一的意図をもって結び付けられたものであると考える。しかしながら、ペングレイスのように完全な統一論の立場をとるわけではない<sup>(3)</sup>。アリストパネースがこの两部分からの引用を行っていることから、彼もまたこの讃歌を一つの作品としてみていたと思われる<sup>(4)</sup>。私の立場はしたがって、詩全体が統一的なデザインをもって構成されていると考え、現在我々が手にしているこの形態を一つの作品として取り扱うというものである。

テューポーンの挿話部分 (digression) (305-355) も、これまで後代の挿入とみられることが多かった。「デーロスのアポローン」, 「ピュートーのアポローン」に「テューポーンの挿話」を加えて、三部から成ると主張する研究者さえ見られる<sup>(5)</sup>。この挿話部分を後代の挿入とする説の根拠は、挿話部分が讃歌全体の主題と内容的に不一致であること、挿話部分と本文との繋ぎ目が構造的にうまく結び付いていないと考えることによる<sup>(6)</sup>。しかしなが

ら挿話と本文の接合部分を詳しく考察し、両者の内容を検討してみると、両部分には有機的な繋がりがあり、挿話部分は讃歌全体の主張と大きく関わっていることがわかる。したがって本論考の目的は、テューポーン挿話を中心としてその前後の部分を検討し、この挿話がいわゆる「入れ子構造」(story - within - story) として、この讃歌の中に明確な意図をもって組み込まれたことを示すことである。

## II. 蛇

テューポーン挿話を考察する前に、まずその前後に語られる雌蛇の物語を考えてみたい。この物語がテューポーン挿話を取り囲む枠組のような働きをしているからである。アポローンは美しく流れる泉のほとりに住んでいる雌蛇を、その強い矢で射殺す(300-301)。テューポーン挿話はこの雌蛇殺戮の5行後に突然始まるのであるが、この雌蛇の話自体もテューポーン挿話同様きわめて唐突とみえる仕方で始まっている(300ff)。すなわちアポローンは神託所を創設する場を求めてクリーサという地にやって来て(283)、そこに平和裡に社殿を建設する(285-9)。クリーサは「美しい泉」と同一視されており、泉すなわちクリーサにアポローンが語りかける言葉は、その少し前にテルプーサに彼が語りかけた言葉と同一である(247-253 = 287-293)。しかしクリーサはテルプーサとは違ってアポローンに異議をとないばかりか、雌蛇が社殿づくりの障害としてその地に存在することさえ言及しない。ところがそこで突然雌蛇殺戮の話が始められる。クリーサと蛇を結び付ける唯一の言葉はἀγχοῦ(300)、つまり蛇が美しい流れの泉の「近く」にいたというだけである。雌蛇とアポローンとの会話もなく、この蛇に関する最初の言及がその殺戮の場面という唐突さである。次の三行では[p]の音を連続させる、ある種の言葉遊びが見られる: κακά πολλά(302), πολλά(303), πολλά(304), ἐπεὶ πέλε πῆμα(304)。これらの言葉によりπῆμα(災い)をもたらすものとしての蛇の本性が効果的に印象づけられ、またアポローンが彼女を殺戮した理由を強調(正当化)する役割をも果たしている。この雌蛇殺戮からすぐにテューポーン挿話へ移行してゆく構成から、テューポーン挿話のアポローンによる雌蛇殺戮と深く関わっていること、そしてその重要性を際立たせるために、そこに配置されていることが理解される。

雌蛇の話の中でアポローンに用いられている呼称についても注目したい。

彼はἀνάξ Διὸς υἱός (301) 「ゼウスの御子なる君」と呼ばれており、ゼウスとの関係がことさら喚起されているようにみられる。アポローンとゼウスの親子関係を示すことは、後に述べるように(第V節)テューポーン挿話を含めた本讃歌全体を貫くテーマの一つである。

### III. 雌蛇とテューポーン物語の対比関係

テューポーン挿話はヘーラーによる出産の物語として、前節で述べた雌蛇のエピソードと同様、唐突に始まる。καί ποτε (305) という語がこの挿話を始める言葉であり、まさにこれはオースティンが言っているように「過去が現在に侵入してくる」<sup>(7)</sup> というような衝撃的な始まり方である。このテューポーン物語は内容的にみて明らかに雌蛇の話と対比的に描かれている。しかし奇妙なことにこの両物語を比べて見ると、テューポーン物語ではその誕生のみが、雌蛇の場合はその死のみが語られている。このようにモチーフが配置されているのは、そのことが詩人にとって何らかの意味で都合が良かったからに他ならない。そこに詩人の意図を窺い知ることができるといえよう。すなわち雌蛇について、その誕生を含む詳細な物語を語らないこと、またテューポーンについてはその死を語らないことは意図的な選択である。テューポーン物語が詩人の意図によってどのようにデザインされているのか、それを検証するためにまず雌蛇物語の詳細を語ることを避けた意味について考えてみたい。

もし雌蛇の誕生物話が語られたとすれば、その蛇がすでにそこに住んでいたということを語らないわけにはいかない。そのことはアポローンが来る前に蛇がその地を占拠していたことを認めることになり、それは明らかに詩人の意図に反することとなる。なぜなら詩人はアポローンが初めてその地に神託所を開いたことを、この神にまつわる重要な誉れとして(事実には反してでも)称えたいからである。実際テミスあるいはガイアがこの地ですでに神託所をひらき、蛇(竜)がそれを守っていたという異伝はいくつかの現存作品でも採られており、詩人はそれらの伝承に敢えて異を唱えているのである<sup>(8)</sup>。「怪物の敗北」が意味するところは、その他の同様の物語が示すように、明らかに古い神殿が新しい神により滅ぼされ奪い取られたことを意味するものである。しかしこの讃歌ではそのことを言及しないようにつとめ、前任者

の存在を否定してあくまでもアポローンの神託所が新しく創設されたものであることを主張している<sup>(9)</sup>。このように雌蛇物語の詳細が語られない第一の理由は、アポローンの神託所が比類ない創設であることを強調するための、いわば戦略であったのである。

雌蛇物語の詳細を語らない第二の理由は、雌蛇の名前にまつわる通俗語源 (folk etymology) である。シモーニデースはこの雌蛇の名前をピュートーンであるとしているが (Fr. 573 Page), 本讃歌ではその名は無視されている<sup>(10)</sup>。もし雌蛇について詳しく語るとすれば、なりゆき上その名を語る必要も生じたかもしれない。しかしこの讃歌にとっては、蛇が殺されて腐敗したこと (πύθειν) からこの地が Πύθω と名づけられたのであるため (372)<sup>(11)</sup>、その前に蛇の名がピュートーンでありその地がピュートーであったことを語ってはならないのであり、それらは注意深く隠しておく必要があった<sup>(12)</sup>。

本讃歌によれば、アポローンが来る前にはこの地には名前がなかった。誰も住む人がいなかったからである。したがってアポローンがこの地にやって来た時、その地はデルポイともピュートーとも呼ばれず、「雪降るパルナッソスのふもとのクリーサ」(269, 282) と語られている。誰もいない地にアポローンが初めてやって来て神託所を創設したこと、それは前述のとおり、この地とアポローンとの間に神聖で犯し難い関係があることを主張するものであり、讃歌詩人にとってきわめて重要な意味をもつものであった。このようにピュートーの名前の由来に関する詩人の独特なこだわりが、雌蛇の詳細を語らない第二の理由である。

第三の理由はテューポーンとの連関である。蛇について知らされているごくわずかな情報として、それが雌であったと讃歌は言っている。他の多くの伝承では蛇は雄である<sup>(13)</sup>。これに対して蛇が雌であることは、この讃歌の中できわめて重要な意味をもっている。すなわち雌であったからこそ、その蛇はテューポーンの乳母になることができたのであり、359行によればそのことが蛇とテューポーンを結ぶ唯一の接点であった。蛇について多くを語ることなく、それが雌であるという一点に焦点を絞ることにより、テューポーンの乳母としての役割を明確に位置づけているのである。また雌であるとしたために、詩人がたとえ知っていたとしてもその蛇を名前で呼ぶことができなかったとも言えよう。なぜならピュートーンと言うのは男性名であるからである。

#### IV. テューポーン

この讃歌においてテューポーンの役割は複雑な色合いを帯びている。すなわちテューポーン挿話の中で必ずしもテューポーンが中心的な役割を果たしているわけではない。彼の誕生が語られるだけで、外見上の姿、ゼウスとの戦いの様子、その死等については何も語られない。しかしテューポーンと雌蛇との類似関係は明白である。テューポーンはπῆμα βροτοῖσιν (306) とされ、雌蛇はπῆμα δαφαινόν (304) と述べられており、両者は等しくπῆμα (災い) をもたらすものであった。両怪物のこのような表現はテューポーン挿話を始める最初の語句とあざやかに響き合っている。

δῶκεν ἔπειτα φέρουσα κακῶ κακόν (354)

[雌蛇は] 悪しきものを悪しきもののもとへと連れて行き、ひきわたした。

すなわち両者は共にκακός, 悪しきものであった。このようにテューポーンと蛇には同じ言葉が繰り返し用いられ、彼等が「同質のもの」<sup>(14)</sup> であることが示されている。

この讃歌でアポロンの敵対者として雌蛇を配置し、他方テューポーン物語を挿話(digression)として語ることは、これは意図的で意味の深い選択である。なぜなら一般的にアポロンにまつわる神話の中で、蛇だけがアポロンの戦った敵というわけではなかったからである。アポロンの闘争神話 (combat myth) の中では、フォンテンローズによれば蛇とテューポーンとは同じ怪物の異形 (variants) であるとされ、その上ΠύθωνとΤύφωνという名前も一つの名の variants である可能性が指摘されている<sup>(15)</sup>。

『イーリアス』にはテューポーンは一度だけ、軍勢が足音高く進む時の比喩として言及されている。

さて軍勢の進むさまは、さながら大地が野火に焼き尽くされるかのよう、足下の大地はうめき、あたかも雷を愛するゼウスが怒りに燃えて、テュポエウスの棲むというアリモイ山の山中で、彼の身をおおう土をむちうつ時のように、進軍する軍勢の足下に大地は高くうめいて、兵士らは疾風の如く野をかけてゆく。(松平千秋 訳)

このようにアリモイの地下に棲むテューポーンの神話は『イーリアス』詩人にすでに知られていたが<sup>(16)</sup>、『イーリアス』ではゼウスとテューポーン間の戦いについては言及していない。しかしながらここにあるように雷とゼウスの怒り、そしてテューポエウスの上の「大地を打つ」という言葉は、おそらく『イーリアス』詩人が『神統記』に語られているような、両者の戦闘物語を知っていたことを示すものであると思われる。

『神統記』820-868はこの戦いについて詳細な物語を語っている<sup>(17)</sup>。それによるとテューポーンはゼウスが主権獲得を果たすための最後の敵だった。ヘーシオドスはテューポーンの性質、姿、属性、力について綿密に語っている。ゼウスとの戦いも生き生きと描写されており、この戦いによって大地、海、天、川、地下に到るまで大いなる影響を被ったとされている。このように詳しく描かれることによりテューポーンのおそろべき力が強調され、そのことはとりもなおさず、彼を滅ぼしたゼウスの圧倒的力を称えるという結果になっている。讃歌作者が『神統記』の内容を知っていたということは多くの研究者の一致して認めるところであるが<sup>(18)</sup>、それにもかかわらず讃歌でこれらの戦闘について一切ふれられていないことは注目に値する。テューポーンの性質について語られているのは、それが人にも神にも似ていないこと(351)と、人間に害をなすものであるということ(352)の二点だけで、これはテューポーン物語の驚くほど切り詰められた縮小版ということができよう。

テューポーンの全生涯を語らない最も明白な理由は、この讃歌のテーマの問題でもあろう。すなわちこれはアポローン讃歌であってゼウスのそれではない。もしゼウスとテューポーンの話が詳細にわたって歌われたとすれば、この讃歌のアポローンを称えるという目的が著しく歪められ弱められることになる<sup>(19)</sup>。第二の理由はテューポーンの話を知っていることを前提としており、このためそれを簡潔に物語ることが可能であったということが考えられる。三番目の、最も重要な理由はテューポーンが事実上、この挿話の主人公ではないという点である。

この挿話の冒頭部分においては、挿話の中心人物が誰なのか曖昧にされている。はじめの行(305)でヘーラーが言及され、次の行でテューポーンが言及される。雌蛇が語られた直後であるので、その連関から中心人物はテューポーンであるのかと、まず推察される。とりわけ307-8でテューポーン

の誕生が語られる時にその感はずますます強くされる。しかし注目すべきことに、強調点は次第にヘーラーへと移されてゆくのである。311行でヘーラーのせりふが始まる時、この挿話でヘーラーが最も重要な役割を演ずるということが明白となる。クレイが指摘しているように、強調点の移動はこの讃歌の特徴といえるかもしれない<sup>(20)</sup>。『神統記』でテューポーンの誕生ではなく死が詳細にわたって描かれているのは、『神統記』詩人がテューポーンに対するゼウスの勝利を強調したためであり、本讃歌がテューポーンの誕生のみ語るのには、彼を産んだヘーラーに焦点をあてたためである。

ゼウスとの戦闘神話のかわりに讃歌はテューポーンの別の側面を描いている。それはヘーパイストスとの対比（類似）関係である（316-21）。ヘーシオドスによる系譜とは違い、ここでヘーパイストスはゼウスとヘーラーの子となっている<sup>(21)</sup>。アテーナーの誕生に対する憤りと相まって、ヘーパイストスの不具に対するヘーラーの憤りが、テューポーンを生むという結果につながっているのである<sup>(22)</sup>。ヘーパイストスとテューポーンの共通点は明確に描かれている：両者とも母親ヘーラーに拒絶され、乳母によって保護される（ヘーパイストスはテテイスに、テューポーンは雌蛇に）。もう一つの共通点はゼウスに対する反逆である。『イーリアス』はヘーパイストスの不具の原因について二種類の物語をあげている。1.590ではゼウスによって、14.395ではヘーラーによって天から落とされたとされ、本讃歌はこの後者の話を採っている。前者、すなわちゼウスによって天から落とされたとする説は、それに先だってヘーパイストスがゼウスに対して何らかの反抗的行為をはたらき、それに対する罰としてこのような事件が起こったことを暗示するものであり、おそらくそのような神話が存在したことを窺わせる<sup>(23)</sup>。したがって、テューポーンもヘーパイストスも、ゼウスの主権に対する挑戦者という点で、共通の役割を果たしていることになる。この共通点は決して偶然のものではない。この文脈の中でヘーパイストスとテューポーンの名が並び語られることは、ゼウスへの反抗が決して声高に語られていないとしても、それ自体がある意味をもっているのである。

## V. ヘーラー

ヘーラーはこの挿話の中で中心的な役割を果たしている。先に述べたとおり挿話に入る第一行目（305）に彼女の名が語られることは、その重要性を

よく示している。讃歌詩人がテューポーンの母をヘーラーとしたのは非常に意味が深い。『神統記』ではテューポーンはガイアとタルタロスの息子であった(821-2)。神話の人物をこのように配置替えすることにより、ヘーラーはテューポーン物語の中心人物となり、彼女の独白が挿話の主要部分を構成することになったのである。

ヘーラーの独白部分とその前後はきれいな環状の構成(Ring composition)をなしている。

- └─300 - 304 (A1) アポローンによる雌蛇殺害
- | └─305 - 310 (B1) 雌蛇によるテューポーン養育
- | | └─311 - 315 (C1) ヘーラーの言葉 (アテーナーの誕生)
- | | | 316 - 321 (D) ヘーラーの言葉 (ヘーパイストスの誕生)
- | | └─322 - 325a (C2) ヘーラーの言葉
- | | (アテーナーの誕生に関してゼウスへの憤り)
- | └─ 326 - 355 (B2) ヘーラーの言葉 (テューポーンを生む決意)
- └─356 - 362 (A2) 雌蛇の死

B1 すなわちテューポーン挿話の前半は、乳母と子供の関係を示すことによって雌蛇とテューポーンの絆を示し、B2 つまりテューポーン挿話の後半は、テューポーン出産の話となっている。その出産はヘーラーのゼウスに対する挑戦として企まれたもので、一方アテーナーの誕生 C1 はゼウスがオリュムポスにおける彼の地位を確立するために計画されたものである。この整然とした構成においてヘーパイストスの誕生は、文字どおりゼウスとヘーラーの策謀と挑戦にとり囲まれる形となっている。環の中央にヘーパイストスの誕生を置くという配置は、ゼウスに対する挑戦者としてのヘーパイストスの誕生を際立たせるものである<sup>(24)</sup>。言い替えればテューポーンの誕生にまつわる詳しい物語は、一方でヘーラーのゼウスに対する策謀を示し、他方でヘーパイストスの誕生の背後にある、ヘーラーの敵対心を明確にする役割をも果たしているのである。

ヘーラーの出産物語はレートーのそれと明確な対比をなしている。レートーの出産に関しては、彼女が出産の地を求めて苦しい旅をしたにもかかわらず、全体的には幸福なエピソードとして描かれている。

女神レートーは喜ぶ,

弓をもつ強い息子を産んだのだから。

喜べ, 幸多きレートーよ, 輝かしい子らをあなたは産みたもうた。

(12-14)

私ははじめにレートーがあなた [アポローン] を人間の喜びとして  
産んだ次第を歌おうか。 (25)

レートーは弓をもつ強い子を産んだことを喜ぶ。 (125-6)

黄金の髪の毛のレートーと知恵に富むゼウスとは, その大いなる心のうちに喜びを覚える, 不死なる神々と共に遊びたわむれるいとし  
い息子を見て。 (205-6)

ことに 205-6 では, レートーは幸福をゼウスと分かち合っている。多くの神々が集って歌い踊る中で (188-201) アポローンはリュラを奏で (201-3), 一方ゼウスとレートーはその姿を見て喜んでいる。

これに対してヘーラーは憤っており, しかも孤独である。その憤りは繰り返  
し語られ, 強調されている。

ヘーラーはゼウスに対して憤ってテューポーンを出産し (307)

ゼウスがアテーナーを頭から産みおとした時憤り (309)

憤って神々のもとから放れ去り (331)

彼 (ゼウス) から遠く離れて (329-330)

ゼウスのもとから離れて (338)

ヘーラーの不幸な状況は子供たちの対比としても示される。すなわち傑出した息子アポローンに対して彼女の息子は不具のヘーパイストス, あるいは怪物のテューポーンである。ヘーラーがレートーの出産を邪魔してエイレイテュイアをひきとめておいたエピソード (99-101) も, 言うまでもなくこのようなヘーラーとレートーの対比に呼応している<sup>(25)</sup>。

ゼウスに対するヘーラーの反抗に焦点はしぼられてゆき, ヘーラーはゼウスを罰そうとする。ゼウスの策謀 (μητίσσει 322) に対してヘーラーは自らも企みを謀ることを表明する (μητίσομαι 325a, τεχνήσομαι 326)。彼女の望みは「ゼウスがクロノスより強いだけゼウスより強い子を産む (339) ことであった<sup>(26)</sup>。この策謀は成功したのか。

再び一年が巡り、時がみちると  
彼女は神々にも人間にも似たところのないもの、  
恐ろしい怪物テューポーンを、人間たちの災いとして産んだ。  
直ちにそれをかかえ、牛の眼をした女神ヘーラーは  
悪しきものを悪しきもののもとへ連れて行き、ひきわたした。  
するとそのものは、それを受け取った。(349-354)

テューポーンが人間にとって災いであったことは繰り返し強調されている(352, 355)。しかし神々に対してはどれほど災いでありえたのか、讃歌は何も語っていない。人間に対する脅威が強調されればされるほど、神々に対しての言及がないのは奇妙である。『神統記』では逆に、テューポーンがゼウス(神)に与えた脅威は語られているが、人間に対する災いについては何の言及もない。この讃歌によれば、ヘーラーの当初のもくろみはゼウスより強い子供を得ることであり(338)、人間にとって益をもたらすか否かは、彼女の視野の外であった。ヘーラーのこの意図が成就したのかどうか、讃歌は明言を避けているが、349の $\alpha\lambda\lambda'$ (しかし)は彼女の望みが果たされなかったことを暗示しているのかもしれない。その前にヘーラーが祈って大地をたたいた時<sup>(27)</sup>、彼女は喜んだ( $\tau\acute{\epsilon}\rho\pi\epsilon\tau\omicron$  342)。また神殿にこもった時、彼女は喜んだ( $\tau\acute{\epsilon}\rho\pi\epsilon\tau\omicron$  348)。したがってこの文脈の中で 349の $\alpha\lambda\lambda'$ をとらえれば、 $\tau\acute{\epsilon}\rho\pi\epsilon\tau\omicron$  -  $\tau\acute{\epsilon}\rho\pi\epsilon\tau\omicron$  -  $\alpha\lambda\lambda'$  となって、結果はヘーラーにとって失望するものであったといえるかもしれない。出産するや否やすぐにその子を取って雌蛇に渡したという記述( $\alpha\upsilon\tau\acute{\iota}\kappa\alpha$   $\tau\acute{\omicron}\nu\delta\epsilon$   $\lambda\alpha\beta\omicron\upsilon\sigma\alpha$  353)は、ヘーラーがその子に愛情を感じることができなかったことを示しているとも考えられる。

子供の養育を乳母に任せることは上流家庭の風習であったろうから、ここでヘーラーが産みおとした子供を乳母に渡すのは、単にその風習に従ったにすぎないのかもしれない。しかし 353の $\alpha\upsilon\tau\acute{\iota}\kappa\alpha$ (すぐに)が行頭に置かれて殊更強調されているところから、ここは単なる風習以上の意味をくみとつてもよいように思う。 $\alpha\upsilon\tau\acute{\iota}\kappa\alpha$ にはいくつかの意味合いが込められていると言える。まず第一に生まれ落ちたものは神のようでも人のようでもなく(351)、何か警戒すべきものであったので、そのためにヘーラーはそれを「すぐに」乳母に手渡したか、あるいは第二に、テューポーンはゼウスの攻

撃を避けるために「すぐに」かくまわれる必要があった、ちょうどゼウスがクロノスからの攻撃を避けるためにクレーターのイーダー山のほら穴にかくまわれていたように。第三にヘーラーはテューポーンに失望して、愛情を感じることができなかった、丁度ヘーパイストスに失望したように。このような三つの可能性が考えられるが、テキストはこの点に関して何も語っていない。したがってヘーラーの企みの結末については明白でない。しかし少なくとも恐るべき子供であるがゆえに、なにか恐るべきことをしでかしたことは暗示されている。

赤子テューポーンを乳母に引き渡す部分はテューポーン挿話の最後の部分であり、この後讃歌は挿話が始まった時と同様、唐突に本文へと戻ってゆく。

δῶκεν ἔπειτα φέρουσα κακῶ κακόν, ἢ δ' ὑπέδεκτο·  
ὄς κακὰ πόλλ' ἔρδεσκε κατὰ κλυτὰ φύλ' ἀνθρώπων.  
ὄς τῇ γ' ἀντιάσειε, φέρεσκέ μιν αἴσιμον ἦμαρ  
πρίν γέ οἱ ἰὸν ἐφῆκεν ἄναξ ἐκάεργος Ἀπόλλων  
καρτερόν·(354-8)

そこで〔ヘーラーは〕悪しきものを悪しきもののもとへと連れてゆき、ひき渡した。するとそのもの〔雌蛇〕はそれを受け取った。そのもの〔テューポーン〕は人間たちの名高い種族に多くの災いをはたらいた。

誰であれ、それ〔雌蛇〕に出会った者は、運命の日がその者を運び去るのだ。

しかしその前に、遠く矢を射るアポローンはそれ〔雌蛇〕に強い矢を射た。

挿話は 355 行で終わる。そこで 355, 356 の二行続けて行頭の同じ位置に ὄς が並ぶことになり、しかもこの二つの ὄς が二つの異なるものを指示しているのは、非常に奇妙な印象を与える。355 行の ὄς はテューポーンであるが、356 行の ὄς は限定されない何ものか、「誰であれ」の意味であり、しかもこの文章では従属節の主語が主文の目的語となる、というねじれた文章構成となっている。

さらに、この前後数行に見られるいくつかの指示代名詞には、入り組んだ

用法が見られる。357行のoiは356行のrñを受けており、このrñは354行のñを受けているという具合である。これらの代名詞はすべて雌蛇を指しているのであるが、このように敢えて雌蛇と明言することを避けて代名詞を用いる表現は、逆に圧倒的な力で効果的に雌蛇をさし示してしているのである<sup>(28)</sup>。しかもそれは何か不吉なことが起こらんとしているのを暗示しているようにもみられる。

このような代名詞の繰り返しは雌蛇に注意を向ける点できわめて効果的であるが、356行のasyndetonによる本文への移行もまた、我々の注意をひく効果がある。このような通常とは異なる語（文章）法は聴衆に驚きをあたえ、関心をひきつけるものと思われる<sup>(29)</sup>。このような語りの手法は神託の言いまわしになぞらえることができるかもしれない。デルポイの神託はヘーロトスにも語られているように、その曖昧ないかようにもとれる文章で有名であった。意味を正確に伝えるための前後関係や説明を削り取り、驚くほど切り詰めた短い唐突な表現で語られる。その唐突さは、この讃歌における挿話の始まりと終わりの唐突さを思い起こさせるし、クロイソスやネロのおそるべき誤解を招く原因となった指示語の取り違え（ヘーロトス『歴史』1. 53&71、スエートーニウス『ネロー伝』38<sup>(30)</sup>）は、この讃歌の代名詞の複雑な使い方を思い起こさせる。

挿話の最後の部分にこのような、いわば衝撃的な文体を用い、そのまま結果を言明しない語り口は、何か名状しがたいことが起こったと暗示しているのではないか。それは、たとえ一時的であったにせよ、ヘーラーの思いどおりに事がはこんだという暗示であるかもしれない。しかしこれはアポローン讃歌であるために、挿話はテューポーンとゼウスの戦いに進む前で打ち切られなければならないのであったのである。

讃歌以外の伝承の中では、テューポーンはゼウスに刃向かう者として重要な役割を演じている。アポドロロスによれば（1. 6. 3）、テューポーンはゼウスの臍を切って打ちのめし、そのためゼウスは痛手をおってコーリュキオンのほら穴に押し込められた。『神統記』ではこの詩の性格上ゼウスの一時的敗北は省かれているが、最終的にゼウスが勝利するまでに、テューポーンとの間にきわめて困難な戦いを強いられたことがうかがわれる。『神統記』851-3にみられるように、「果てしない喧騒と恐るべき戦闘」の後にはじめてゼウスは勝利をおさめることができたのであった<sup>(31)</sup>。これらの伝承によるかぎり、テューポーンはヘーラーが望んだように十分強力であり、

ゼウスはうち負かされる危機に瀕したのであった<sup>(32)</sup>。

したがってテューポーンはこの讃歌において、主権交代神話の中で脅威をもたらした者として描かれているのではないだろうか。ウーラノス、クロノス、ゼウスへと続いた権力の交代は、そのすべてにガイアが関わっている（『神統記』173-175, 485-496）。しかしゼウスがクロノスを敗った時になぜかガイアがゼウスに刃向かうことをやめたために、子が父を倒す連鎖の環がち切れたのであった。このためゼウスの覇権が確立されたわけであるが、この讃歌によれば、今ここでヘーラーがその息子による反撃によってゼウスを追い落とし、新たな主権交代のサイクルを始めようと試みているかのよう<sup>(33)</sup>にみられる。まさにこのことが、このアポローン讃歌にテューポーンの話が挿話として組み込まれたことの意味であると思われる。すなわちもし主権交代神話の文脈の中でアポローンによる雌蛇殺戮を考えるなら、アポローンとテューポーンとの繋がりが明確に浮かび上がってくるのである。

讃歌において雌蛇がテューポーンの乳母であることはきわめて重要である。ゼウスの主権交代神話ではレイアによって託されたガイアがゼウスの乳母であった。したがってガイアと雌蛇は、ゼウスとテューポーンに対して同様の役割関係にある。つまりゼウスがガイアの助けによりクロノスを覆したように、テューポーンも蛇の助けによりゼウスを覆したかもしれなかった<sup>(34)</sup>。『神統記』485-6, 494によれば、もしガイアの策謀がなければゼウスはクロノスをうち敗ることはできなかった。そうであればクロノスが宇宙を支配し続けていたであろう。つまり主権交代神話においては、反乱を企てる者の乳母がきわめて重要な役割を果たしているのである。したがってアポローンによる雌蛇殺戮は、ここにおいて新たな意味を帯びてくる。すなわち乳母である雌蛇を殺すことにより、アポローンはゼウスへの反逆者テューポーンに決定的な打撃を与えたのである。雌蛇殺戮は、それゆえ単なるアポローンの武勇談の一つにとどまらない。アポローンは主権交代劇に介入し、ゼウスの危機を救ったのである。

ヘーラーはその子テューポーンによって彼女の望みを成就したかもしれなかった、もしアポローンがテューポーンの乳母である雌蛇を殺すことによりゼウスを助けることをしなかったなら。これがこの讃歌のさし示すところであり、テューポーン挿話を入れ子構造のようにして讃歌に組み入れた真の目的である。この讃歌の背後にはフォンテンローズが言うように、アポローンの蛇退治を詳しく物語る歌がかつて存在していたと考えることができる

かもしれない<sup>(35)</sup>。

アポローンによるゼウス援護は讃歌の中で明言されてはいないものの、冒頭場面（2-13）は明らかにアポローンの勝利を祝う情景であると解釈されよう<sup>(36)</sup>。但し初めの三行は何か危険な波乱含みの幕開けを示し、讃歌の冒頭としては驚くべき始まり方である。讃歌はゼウスの宮殿における神々の集まりの場面で始まる。アポローンが宮殿に入ると彼は輝く弓を引き絞り、神々はそれを見て震えおののき椅子から立ち上がる（2-4）。なぜこのような情景をもってこの讃歌が始まっているのか、古来大きな謎とされてきた。しかしここに漂う異様な緊張感は、アポローンがたった今テューポーンとの戦いから戻って、その力を神々の前に誇示している瞬間だと言えないだろうか。

これに続く描写も重要である。

だがレートーだけは雷を喜ぶゼウスのもとにとどまっている。

女神は弓をゆるめ箆の蓋を閉じ

彼のたくましい肩から弓を両手で取り、

父の座る柱に打たれた

黄金の留め金に弓を掛ける。

そして彼を連れて椅子に座らせる。

父は愛しい息子を喜び迎えて彼に黄金の杯でネクタルを与える。

そうしてはじめて他の神々も席につく。そこでレートーは喜ぶ、

弓を持つ強い息子を産んだことを。（5-13）

レートーがアポローンの弓を肩からはずし箆の蓋を閉じる時（6）、彼女はアポローンの帰還を歓迎していることを意味すると同時に、戦いは終わり、ここにいる神々はアポローンの敵ではない、ということをアポローンに示しているのである。それから彼女はアポローンの肩から彼女の両の手で弓をはずし、それをゼウスの椅子の後ろにある柱の黄金の留め金にかけた（7-9）。この綿密で注意深い描写は、アポローンの武器のきわめて危険であること、またそれはとりもなおさずアポローンの強さを印象づけることにもなっている。その結果、アポローンが今武装を解くことの重要性が明確に示されているのである。

ことさら意味深いのは弓が掛けられた場所である。それは「ゼウスが座っ

ている椅子の後ろにある柱の黄金の留め金」であった。これは二つの意味をもっている。第一にこの場所に弓が掛けられることにより、アポローンはこれ以後ゼウスの同意なしに弓を使うことができない、したがってアポローンはゼウスの権力の中に組み入れられたということ、第二に、アポローンの弓とアポローン自身に（ゼウスの主権を護るという）大いなる業にふさわしい榮譽が与えられたということである。

レートーがアポローンを椅子に座らせる行為（9）は、もう戦いが終わったことを明白に物語っている。つまりレートーはこの一連の行為により、アポローンがゼウスのもとに従うべきことを教えているのである。ゼウスはこれを歓迎し、自ら黄金の杯にネクタルを注ぎアポローンに与える（10-11）。これはアポローンのテューポーンに対する勝利の祝いであり、ゼウスがアポローンの功績を認め、感謝していることを示しているのである。つまりゼウスとアポローンとの間の平和的協調が成立した祝賀の宴であった。そのことは主権交代神話にとって特別な意味を持っている。ゼウスにとっては敵はテューポーンのみではなく、自らがそうであったように、我が子アポローンにその主権を脅かされる可能性もあったからである。このように両者の和平が確認されてはじめて（ἐπειτα . . . ἔνθα 11-12），他の神々は安堵して席に座り、レートーも喜びをおぼえるのである。注目すべきことは、この一連の場面をすべて取り仕切っているのがレートーだということである。ヘーラーはテューポーンを通じてゼウスの権力を覆えそうと試みた。これに対してレートーはゼウスを助け、アポローンに影響を及ぼすことにより、いわば彼女がキングメイカーの役割を果たしていることがわかる。

この讃歌の冒頭部分はこのように、テューポーン挿話で語られる物語の結果として起こった出来事であり、テューポーン挿話は特に讃歌の冒頭部分と緊密な連関をもっているのである。そこには宇宙の支配権をめぐる神話が背後に隠されており、その壮大な争いが視野に入れられている。以上のように考えることにより、従来解釈が困難とされてきたこの讃歌の冒頭部分、とりわけアポローンがなぜ神々の脅威としてたち現われるのか、なぜ讃歌がこのような不吉な緊張感をもって始まるのか、という重大な問題が解明されるのである。

## VI. 結論

以上の考察においてこの讃歌の挿話部分の特殊な性格を論じてきた。これによって明らかになったことは、テューポーンの話は入れ子構造 (story - within - story) の形態をとることにより、その外枠をなす雌蛇殺戮の重要性に焦点をあてている、ということである。挿話と本文の間の唐突な移行は、雌蛇とテューポーンの二重写し (類似性) を強調するとともに、両部分の関連性を曖昧なままで残しておくことにより、言葉で語られない広がりがあることをかいま見せる効果をあげている。アポローンによる雌蛇殺戮は、ゼウスによるテューポーン攻略の、この上なく強力な援護となった。オリュムポスの主権交代劇を視野の内に入れることによって、雌蛇殺戮、入れ子構造としてのテューポーン物語、更に讃歌の冒頭、の三部分に見事な有機的繋がりがあつたのを見出すことができた。

挿話部分のもう一つの側面としてモチーフの繰り返しという点が指摘されよう。テューポーンが強く有害であるなら、蛇はもっと強力で有害なのである。これが同様な話を繰り返すことで挙げられる効果である。モチーフの繰り返しはこの挿話部分のみならず、本讃歌全体にわたって指摘することができる。レートーの出産の場を求める旅 (30-50) は神託の場を求めるアポローンの同様の旅 (216-228) によって繰り返され、テルプーサの話は雌蛇物語と類似した繰り返しである。神々の集うモチーフは、先に述べた冒頭場面の他に、再び 187-206 でも歌われる。後者は更にデーロスにおけるイオーニア人の集い (146-164) と対置されている。

イオーニア人の中で歌われるデルポイの娘たちの歌は、入れ子構造のもう一つの例である。なぜなら彼女たちはアポローン (レートー、アルテミス) 讃歌を、『アポローン讃歌』の中で歌っているからである。このようにテューポーンの話は、モチーフの繰り返しと入れ子構造という二つの語り的手法によって、讃歌の他の部分と構造的に一貫した性格を帯び、主権交代神話という点で内容的にも明確な繋がりをもっているのである。

雌蛇とテューポーン物語をこの讃歌の中で取り上げた詩人の目的の一つは、ヘーラーについて歌うことであつた。つまりヘーラーの登場により、この讃歌の本来の目的 — アポローンを称えること — が効果的に語られることになつたのである。アポローンは雌蛇を殺すことにより、ヘーラーによるゼウス打倒の野望を打ち砕き、結果として彼自身と母レートーの地位を高めることに成功した。雌蛇の殺戮はしたがって、彼がオリュムポスにおいて自らの地位と威光を確立する過程における、決定的な機会だったのである。N.

オースティンの言うとおりに、確かに「digression は物語展開が最も緊迫した時に最も長く、その細部は最も詳細に語られる」<sup>(37)</sup> のである。一見アポローンとは何の関係もないかに見えるテューポーンの誕生神話を克明に物語ることにより、その直前で語られる雌蛇殺戮がアポローンにとって、そして宇宙の支配者たらんとするゼウスにとっていかに重要な意味をもっていたかということを明確に指し示しているのである。詩人はテューポーン物語を入れ子構造の中に配置し、旧知の物語を彼の意図に沿って展開し色づけることにより、アポローンを称えるという目的にとって多大な効果をあげることができたのである。

## 註

(1) ドイツ人研究者の多くは分析論的立場をとっている。この讃歌の初期の研究史については Drerup (1937) 81-99, 統一性についての詳細な論述は Förstel (1979) 20-59 参照。

(2) 例えば West (1975) 161-5 は、言及される地名と文体論的差異（語頭のディガムマの無視など）を認めながらも、両者のあいだには「明白な類似性」が見られるとしている。Burkert (1979) 61 は、ポリュクラテースがデーロスで催した祭典 (BC522) において、キオス出身のホメーリダイのある者が本讃歌を作成あるいは編集したと考える。Janko (1982) 103-4 は、177-8 が讃歌の通常終句であること、両部分の宗教的関心が異なっていることから、本讃歌を 178 行で二分するものの、キュナイトスが BC522 の祭典で一つの讃歌に結び合わせたとしている。但 Janko は Clay の著作の書評 CR 41 (1991) 12-3 では、より統一論的立場をとっている。Sowa (1984) 173, 183 は、宗教、言語、定型句の点で違いがあるものの、主題の連続と統一性が見られるとしている。

(3) Penglase (1994) 117.

(4) Allen & Sikes (1904) 82 によると、『鳥』575はおそらく本讃歌114行を、『騎士』1016は443行をもじったものである。

(5) 後代の挿入、編集に関する議論は Allen & Sikes (1904) 65, Clay (1989) 64 参照。

(6) 例えば Janko (1982) 116.

(7) Austin (1966) 303 は更に、「過去の出来事は単に教訓的範例として用

いられるのみならず、現在の可能性の積極的な証拠としても用いられる」と指摘している。

(8) アISKYロス『エウメニデス』1-8によれば、デルポイの神託所はガイアからテミス、ポイベーを経てアポローンのものとなった。エウリーピデース『タウリケーのイーピゲネイア』1234-1282では、アポローンは蛇に護られていたテミスの神託所を奪ったことになっている。

(9) Sourvinou-Inwood (1991) 231 はこれを系列の上位に位置する者による、暴力的な乗っ取り (take-over) の例であるとしている。Clay (1989) 62 は「デルポイにおけるアポローン以前のいかなる神託所も拒否ないし無視することにより、アポローンの神託がきわめてオリュムポス的なものであり、この神託所がオリュムポスの系列に属する施設であることが主張されている」という興味深い指摘をしている。但しアルカイオスの『アポローン讃歌』もアポローンをデルポイ神託所の最初の所有者としている。パウサニアース 10. 5. 6-8 は両方の伝承を伝えている。

(10) しかし 363-74 に見られるいわゆる言葉遊びからすると、詩人はその名をもちろん知っていたと思われる：πύθειν (363), πύσει (369), κατέπυσε (371), Πυθα (372), Πύθειον (373), πύσε (374)。

(11) 「腐る」ということは、太陽神としてのアポローンの権能を示しているのであろう。374行「まさにその場所で太陽の射ぬく力が怪物を腐らせた」は、このエピソードの最終行として語られ、その行末の語 Ἡελίοιο は殊更強調されていると見られるからである。Miller (1986) 89 は、「腐る」ということは死体を葬ることなく鳥や野犬の餌食となるにまかせるということであり、これは英雄たちの戦いにとって最も厭わしい状況として描かれている、と指摘している。

(12) アポローンは神託所にふさわしい地を求めて旅をしていた際に、テーバイが「住む人のいない」(226)とされているのも、アポローンの「初めての」行為を称えるためである。

(13) Fontenrose (1959) 13-21 はアポローンによる蛇との戦いの伝承を五つの類型に分類している。それによると雄蛇である場合が圧倒的に多く(例えば『タウリケーのイーピゲネイア』1245, アポロドーロス 1. 39, パウサニアース 10. 65), 雌蛇でかつ詳細な物語を残しているのは本讃歌のみである。後代の作家ではデルピュネーという雌蛇を登場させるものもある。

が、これはテルプーサの異形とみられる。

(14) Miller (1986) 84.

(15) Fontenrose (1959) 91 はこの二語の変化の過程を、歯音-母音-唇音の組み合わせが、唇音-母音-歯音となり、語頭の子音が帯気化されず、語末の子音が帯気化されたまま残った、と説明している (ΤΥΦ → ΠΥΘ)。この変換を音韻学的に完全に証明することはできないが、Buck (1933) 129 は θείνω -- ἔπεφνον の語群例をあげ、ギリシア人はこのような二種類の語群の変換を無意識に行っていた、としている。Sihler (1995) 162-3 は \*gwh が t にも p にもなるいくつかの例をあげているので、このことはテューポーンとピュトーンが同根の語から派生したことを部分的にせよ説明するかもしれない。

(16) アリモイが部族名なのか地名なのか、すでに古代においても不明であったらしい。ピンダロス『ピューティア』祝勝歌 1.15 ではテューポーンはエトナ山の下に棲んでいたとしている。Kirk (1985) ad. loc. は、アリモイの可能性としていくつかの地名を Strabo 13. 626 によって提示している：ミュシア、シリア、エトナ山、ピテクーサイ等。アリモイに関する詳細な議論は West (1966) 250 参照。

(17) ヘーシオドスはここでは Τυφωεύς の語形を用いているが（この語形は本讃歌でも一度だけ 366 行に見られる）、更に Τυφάων (306) という形も用いている。West (1966) 252 によればこれらの語形は同一名である。Allen & Sikes (1904) 111 はマニユスクリプトに見られる興味深い用例として Τυφ]ωνεύς という形を載せている。これは Τυφωεύς と Τυφάων の混合形とみられる。

(18) 例えば Janko (1982) 119, Clay (1989) 66, O'Brien (1993) 16.

(19) Miller (1986) 87-8.

(20) Clay (1989) 33 はレートーの旅における地名カタログ (30-49) を「強調点が徐々に移行しており、これは讃歌詩人が好んで用いた手法である」と指摘している。

(21) 317 行の ὄν τέκον αὐτῆ の意味は明白ではない。Allen & Sikes (1904) 106, Miller (1986) 85, Clay (1989) 68 に従って、「私自身の子」ととる。『神統記』927 ではヘーパイストスは「ヘーラーだけでもうけた子」となっている。ヘーパイストスの親については、本讃歌はホメーロスと同じ伝承を採っ

ている。

(22) Janko (1992) 199.

(23) O'Brien (1993) 101-2.

(24) Stanley (1993) 8 は ring composition においては中央に置かれた要素が強調されると指摘している。環の中央の重要性については Lohmann (1970) 25 参照。

(25) ヒュギーヌス『物語集』140 によれば、レートーが出産の場所を求めて放浪せねばならなかったのはヘーラーによる企みのせいではなく、蛇に追われたためであり、その時ポセイドーンがレートーに避難所としてデーロス島を与えたという。本讃歌 230-8 に、オンケーストスにおけるポセイドーンの神域について不思議な言及があるのは、この伝承と関わりがあるのかもしれない。

(26) Janko (1992) 199, 237-8 は、ヘーシオドス Fr.343 West に「メーテイスの子はゼウスより強い者となろう」(8) との記述があることから、ゼウス支配が危機に瀕する物語がかつて存在していたのではないかと想定している。

(27) 大地をたたくのは多くの場合復讐を意味する。メレアグロスの話でも、アルタイアは大地をたたく（『イーリアス』9.568-9）。ヘーラーのクトニックな性質については『イーリアス』14.271-9, 15.34-8。

(28) 代名詞の繰り返しは、πίθειν (363) で始まる言葉遊び（註 10 参照）とも強い対比をなしている。

(29) 挿話から本文への唐突とみえる移行はこのほか『イーリアス』9.563-4, ピンダロス『ピューティア祝勝歌』11.37-8 にもみられ、同様の効果をあげているとみられる。

(30) デルポイの神託が「74 に気をつけよ」と言った時、ネローは自分がその年齢になるまで皇帝として統治できると考えていたが、神託は彼の後継者たるガルバの年齢を意味していたという。

(31) これに対してゼウスはさほどの困難もなくテューポーンを倒したとの伝承をとるのはアイスキュロス『縛られたプロメテウス』353-74, 『テーバイを攻める七将』511-7, ピンダロス『ピューティア祝勝歌』1.15-20, 8.16『オリュムピア祝勝歌』4.7。

(32) Scholia B to Il. 2.783 は異伝を伝えている。それによると、ある時

ヘーラーはゼウスに憤りをおぼえ、クロノスに接近して助けを求めた。クロノスは彼の精液をかけた卵を二つ与え、それを大地に埋めればそこからゼウスを破るようなダイモーンが生まれると語った。ヘーラーがそのとおりに行くと、アリモイ山の下からテューポーンが生まれてきたという。

(33) Föstel (1979) 262-3, Thalmann (1984) 44, Clay (1989) 68, O'Brien (1993) 96 も同様の指摘を行っている。但しこの場合の主権交代は、これまでの三代にわたる息子による父親打倒の物語とは多少意味合いを異にする。テューポーンはヘーラーの子ではあっても、ゼウスの子ではないからである。

(34) 母（支配者に敵対する）－息子－乳母 の関係においてスケールの大きな対比関係が見られる：レイア（クロノスに敵対）－ゼウス－ガイア に対して、ヘーラー（ゼウスに敵対）－テューポーン－蛇。Clay (1989) 71 は踏み込んだ議論はしていないがゼウスとテューポーンが対比関係にあることは指摘している。

(35) Fontenrose (1959) 1257-9.

(36) Clay (1989) 74 はこの場面を「父親の権力を奪取せんとする息子の感情が激しく炸裂し、恐怖感が全体を支配している」と解釈しているが、アポローンが脅威をあたえる存在として登場するのは2-4行だけであり、冒頭場面全体を支配する雰囲気は明らかに暴力の恐怖ではなく、祝勝の喜びである。

(37) Austin (1966) 306.

## Bibliography

- Allen, T.W. and Sikes, E.E., *The Homeric Hymns*, Macmillan, 1904.
- Austin, Norman, "The Function of Digressions in the *Iliad*", *Greek, Roman and Byzantine Studies*, 7 (1966) 295-312.
- Buck, Carl Darling, *Comparative Grammar of Greek and Latin*, The University of Chicago Press, 1933.
- Burkert, Walter, "Kynaithos, Polycrates, and the Homeric Hymn to Apollo", *Arktouros*, Hellenic Studies presented to B.M.W. Knox, 1979, 53-62.

- Càssola, di Filippo, *Inni Omerici*, Milano: Fondazione Lorenzo Vella, 1975.
- Clay, J. S., *The Politics of Olympus, Form and Meaning in the Major Homeric Hymns*, Princeton University Press, 1989.
- Drerup, E., "Der homerische Apollonhymnos: Eine methologische Studie", *Mnemosyne*, 5, 81-134.
- Fontenrose, Joseph, *Python, A Study of Delphic Myth and its Origins*, University of California Press, 1959.
- Förstel, Karl, *Untersuchungen zum Homerischen Apollonhymnos*, Bochum: Studienverlag Brockmeyer, 1979.
- Hainsworth, Bryan, *The Iliad: A Commentary*, vol. III, Cambridge University Press, 1933.
- Janko, Richard, *Homer, Hesiod and the Hymns*, Cambridge University Press, 1982.
- , *The Iliad: A Commentary*, vol. IV, Cambridge University Press, 1992.
- Kirk, G. S., *The Songs of Homer*, Cambridge University Press, 1962.
- , *The Iliad: A Commentary*, vol. I, Cambridge University Press, 1985.
- Lohman, D., *Die Komposition der Reden in der Ilias*, Berlin: Walter de Gruyter, 1970.
- Miller, Andrew M., *From Delos to Delphi, A Literary Study of the Homeric Hymn to Apollo*, Leiden: E. J. Brill, 1986.
- O'Brien, Joan V., *The Transformation of Hera, A Study of Ritual, Hero and the Goddess in the Iliad*, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers, 1993.
- Penglase, Charles, *Greek Myths and Mesopotamia, Parallels and Influence in the Homeric Hymns and Hesiod*, London: Routledge, 1994.
- Stanley, Keith, *The Shield of Homer, Narrative Structure in the Iliad*, Princeton University Press, 1993.
- Segal, C., *The Theme of the Mutilation of the Corpse in the Iliad*, *Mnemosyne Supplement* 17, Leiden: E. J. Brill, 1971.

- Sihler, A. L., *New Comparative Grammar of Greek and Latin*, Oxford University Press, 1995.
- Sourvinou-Inwood, Christiane, *'Reading' Greek Culture, Texts and Images, Rituals and Myths*, Oxford: Clarendon Press, 1991.
- Sowa, Cora Angier, *Traditional Themes and the Homeric Hymns*, Chicago: Bolchazy-Carducci Publishers, 1984.
- Thalman, William G., *Conventions of Form and Thought in Early Greek Epic Poetry*, Johns Hopkins University Press, 1984.
- West, M.L., "Cynaethus' Hymn to Apollo", *Classical Quarterly* 25(1975) 161-170.
- , *Hesiod, Theogony*, Oxford: Clarendon Press, 1966.
- Willcock, M. M., "Mythological Paradeigma in the *Iliad*", *Classical Quarterly* 14 (1964) 141-154.